

子供のいる風景

—『年会会場』の保育室について

オバードクター5年目ようやく就職がきまったとき、私は妊娠中で大きなお腹をかかえていた。夫が2年間アメリカ（ルイジアナ州）にでかけてしまったので、出産後、私は大学の休みごとに乳児をつれて逢いに行った。夏休みや春休みには1カ月だけ子どもを保育園に入れ、私は出張扱いで夫の滞在していた大学で研究したこともある。

私自身が、アメリカに2年間出張することになった時には、子づれ単身赴任と称して、当時4才の子供をつれて行った。評判のよい保育園に子どもを入れるのはアメリカでも難しいようで、長い入園希望者のリストがあった。私はペンシルベニア州とイリノイ州の2か所を経験したが、幸いどちらでも最優先で子供を預けることができた。大学院生やポストドクの人々の順番も飛ばしてしまったのは、どうやらイリノイ大学客員助教授の肩書きが効いたためらしい（何事も中途半端はかえって不利というのが私の人生教訓である）。

滞在先の天文学教室には女性研究者も多く、研究室に毛布を敷いて子供を昼寝させることは珍しくなかった。アメリカ天文学会の年会にも子連れで参加する人も多く、夕方には子供が急に会場にあふれ出す。アメリカでは幼児におしゃぶりをあたえるから、子どもがいても会場は静かだ。自分の席の隣にベビーカーを置いて講演を聞いている人もいた。私も会場のホテルで紹介されたベビーシッターさんに娘をあずけた。でも食事があわないことと、ホテルでは遊ぶ場所や玩具がないことが不便であった。

さて帰国してみると、日本でも年会会場に幼い子供をよくみかけるようになっていた。見るところ女性の天文学者はほとんど同業者と結婚している。しかも観測屋は観測屋、理論屋は理論屋という風に世界が非常に狭い（かくいう我が家もそうであ

る）。したがって夫婦一緒に学会出張をすることも多く、子供をどうしようかと悩む。私も会場に子供をつれていって隣にすわせたこともあるが、OHPを使う時には会場が暗くなるので子供は本も読めない。頼れる実家が近くになれば結局、夫婦交代で会期の半分ずつ参加するはめになる。

年会会場に保育室があればいいなどは昔から思っていた。せっかく年会実行委員になっていることでもあるし、他の委員も賛成してくれたので、テネットで学会員にアンケートをとり、意見をつつた。すると現実に小さい子供を育てている人や子育てに苦勞した世代から賛成意見がよせられたばかりでなく、さまざまな人から賛意を頂戴した。若い独身男性からも激励のメールが来て、時代の移り変わりをしみじみと感じ、また励まされた。そこで保育室立ち上げのための電子メールネットワーク（獅子座ネット）をつくり、意見を出しあい、情報交換をした。読んで元気の出るメールが飛び交って、私自身もはげまされた。

ここで寄せられた意見を少し紹介したい。まず、切実な声から。アンケートからは、学会に子供を連れて来ざるを得ない事情があり、子づれで参加した、または子供がいるために学会参加をあきらめた、等の経験のある人がかなりいることがわかった。子供のいる人で自分の両親などが近くに居ない場合、学会のたびに子供の面倒を見てくれる人を探すのが困難で、学会出張そのものが難しくなる。遠方から参加する場合には、その宿泊地で子供を預けられないと困る。ぜひ保育室を設置してほしい、という切実な声が寄せられた。

また、保育室設置は若い人へのはげましになる、と言う声も強かった。結婚相手が研究者である場合には、将来にわたって同じ場所に住めるとは限らない。そのため子供を持つことを躊躇している若い人がたくさんいる。学会の会場で保育室を作る等の動きは、出産をためらっている人にも朗報。また育児に忙しい人に対する周囲の配慮を促すことにもなる、など。



写真1 保育室風景。シッターさん力作の貼り絵のおかげで暖かな雰囲気になった。

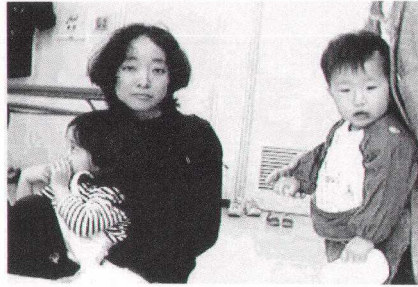


写真2 保育室の親子2組。

学の親子1組，秋（宇都宮）も同じ申込数で利用はのべ8人であった。東大駒場，宇都宮大学の方には何かとお世話になり感謝している。

利用者の評判は「これまでも遠方から自分の親に無理をいって来てもらい，子どもを預けなければ，学会に

参加できなかったので，絶対に出なければならぬ時にしか参加ができなかった。今回は気楽に参加できてとても助かった」「保育室の設備やシッターさんなど環境がととのっており，安心して子どもを預けられてよかった」「会場の近くなので講演が終ればすぐ子どもの様子を見にいけてよい」「子どもが楽しく過ごせた」などの感想が聞かれた。

保育室は次回の都立大と山形大学でも設置する予定なので，どんどん利用していただきたい。年會に参加する会員なら誰でも利用できる。学生の方も遠慮しないで利用してほしい。講演発表をしなくても，つれあいが天文学会員でなくても全くなまわらないのだから，保育室に子どもがあふれて困るような時代が早くこないかと期待している。

保育室の設置は一度やってみれば意外に簡単だった。秋の年會では，保育室がまだ2回目だというのに，「保育室もすっかり軌道にのりましたね」と何人もから言われ，あらためて天文学者の状況変化への柔軟さを感じた。やり出すまでの模索段階が大変なので，他の学会にも同じような状況で困っている人もいるだろうと考えて，天文学会のホームページに保育室設置の情報をのせた。保育室設置の経過や議論，アンケート用紙や保育概要など，他の学会ですぐまねして使えるようにしているのでご活用いただきたい。

保育室設置について，これまで多くの学会員に暖かな応援をいただいていた。あらためてここで感謝したい。

年會実行委員長 加藤万里子（慶応大学）

一方，保育室の設置に消極的な意見は，主に，万一の事故があった場合に学会は責任をとれない，というものであった。ただし学会に子供をつれてくるのはイカンという意見はみられなかった。事故の可能性に対しては，プロの保育者を雇い，事故が起こらないように万全の注意をすることにした。シッターさんの派遣を依頼した派遣会社は，イベントの託児室担当の経験が豊富で，保母・看護婦の有資格者を派遣してくれる。また，事故に対しては子供とシッターの両方に適用される保険にも加入している。さらに会場のどこかに親がいるので，その居場所を明らかにしておいてもらうことや，食べ物親が保育室を覗いたときに与えるなどのガイドラインを作った。また相互の誤解などが簡単に訴訟などに発展してしまわないよう，獅子座ネットでの議論を徹底し，保育室設置の精神を理解してもらうように努めた。

こうして97年春の年會（駒場会場）で，初めて保育室が設置された。駒場には畳の部屋がなかったので，普通の教室から机と椅子を出し，水ぶきのゆか掃除をしてカーペットとベビーベッドを入れた。宇宙地球科学教室から，電子レンジと冷蔵庫（ベビーフード用）を拝借してなんとか保育室らしくなった（写真参照）。宇都宮会場では大学会館にタタミの部屋があったので，保育室への変身は楽であった。利用人数は97年春（駒場）では3家族4人から申込があり，利用は3日間でのべ6人と見